

## コメのゼマンティック：古代国家におけるコメの機能と動態

金沢大学・三重大学 碓井 崧

1 目的 幕藩体制の崩壊以前の伝統社会において、コメは食料であるとともに、食品以外の機能を担う象徴的メディアの性格をもっていた。ここで「コメ」というのは、イネ、稲穂、コメ、コメの加工品（モチ・サケ等）を含む総称である。このコメの機能は、「経済」、「権力・統治」、「連帯・統合」、「信仰」の諸領域にわたり、AGIL 図式に重なるものがあるものの、近代的機能分化以前の諸様相を呈している。これら食料以外への主題変換、とくに「聖穀」化は、コメの生産力の相対的低さと希少性に由来する。古代のコメをカミ、タマ（魂、霊、精霊）と理解し、記紀・万葉集・風土記・延喜式とくに祝詞によってコメ儀礼をとらえている折口信夫の言説を検討する。かれの「大嘗祭の本義」（1928）及び「同 別稿（草稿）」（1928）をテキストにして、コメについてのゼマンティック系を定式化する。古代史家たちに影響を与えているこの論文を、社会学の観点で検討する。また、民衆レベルと宮廷レベルの双方で行われる新嘗祭がどのように関連しあっているかの問題（フレーザー問題）を扱う。古代国家・社会のアニミズム的性格、社会システムの構造と変動、農業技術、収取・貢納システムが折口のゼマンティックとどのように対応するかを考察する。

2 方法 「ゼマンティック」は、文化とコミュニケーションに関わる「主題の備蓄」で、「有意味の諸形式」である。コメのゼマンティックを、近代の「機能的分化社会」以前においてたどると、コメの象徴的メディア性を中心に、コメのプログラム、コード、言説、神話のゼマンティックを見ることができる。ルーマンのゼマンティックの諸研究の中でも、政治のゼマンティック、愛のゼマンティックの手法が範型となる。歴史学・民俗学のデータを社会学の観点から再解釈する手法として、長期的持続（ブローデル）、長期的変化（エリヤス）の観点のもと、持続的な儀礼、制度と、それらの発生論的側面に着眼する。

3 結果・結論 折口の「大嘗祭の本義」は、社会的にみて二分野の言説にわたる。

1) 天皇霊とともに、イナダマは外来霊として天皇の霊威に関わっている。地方豪族が稲穂を天皇に奉げることは絶対服従を意味し、また、ユキ（悠紀）・スキ（主基）の二国が、稲見公、酒造子を立てコメとサケを献上し、それらの霊威を天皇の身体に付ける意味が認められている。2) コメのゼマンティックに関わる社会構造・政治構造として、食国（ヲスクニ）と神政政治（祭政一致）があげられる。古代国家の中央集権化は、アニミズム的心性によって支えられている。機能図式の「信仰」次元と「権力・統治」次元とが未分化状態にあって、「神政政治」の性格を帯びている。折口では余り明瞭でない時代範囲は、ヤマト政権とくに雄略朝以降と考え、氏姓制度の部民制が律令制度の公民制へと変化する時期までの議論として位置づけられる。コメが、祭儀のカミから租税としてのモノへと変化していく発生論的糸口が示される。コメの聖なる穀物の特性が、その後、全面的に失われてしまった訳でなく、田の神信仰の基層文化として持続している。その後のコメの合理的計量化と財源化、石高制の権力配分指標化、共同体連帯と契約儀礼の象徴的メディア化が顕著になっていく。参考文献一覧は、報告当日に配布の予定。